

平成29年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

岐阜県立揖斐特別支援学校

学校番号

108

自己評価

1 学校教育目標	児童生徒がもつ可能性を最大限に伸ばし、可能な限り地域社会に参加していく基礎的・基本的な力を身に付けることができるように、次のことをねらいとする。 ・児童生徒一人一人の障がいの状況や特性、発達段階等に応じたきめ細かい教育支援を行う。 ・仲間や地域と共にくましく、明るい生きる力を育む。 ・児童生徒が主体的に社会参加するための必要な基礎的・基本的な知識や技能を培う。
2 評価する領域・分野	◇中学部
3 現状及び保護者を対象とするアンケートの結果分析等	・教師と児童生徒の信頼関係及び保護者との連携については、9割以上の保護者から良好な評価を得ている。 ・進路指導やキャリア教育については、生徒・保護者への情報提供や生徒支援の一層の充実が望まれる。
4 今年度の具体的かつ明確な重点目標	(1) 作業学習における、「深い学び」につながる達成感のある授業づくり ・作業学習のねらいを明確にし、指導内容の精選と指導方法の充実を図る。 ・集団への関わりを意識させながら社会性を養うことを目指した取組を工夫する。 (2) 重複障がい・準ずる教育課程における、自発的・主体的な学びを実現する授業づくり ・重複障がい課程では、「製品づくり」を通して授業での自発的な場面を増やす。 ・準ずる課程では、ICTを活用した「気づき」「学び合い」の多い授業を設定する。 (3) 掃除指導を通した、公共心の育成 ・学年全体で時間や場所を設定し、クラスや生徒の実情に合わせて清掃活動を充実させる。 ・学年全体で取り組むという意識を共有させることで公共心を養う。 (4) 居住地校及び谷汲中学校を中心とした地域との交流の充実 ・交流活動を通して、視野を広げコミュニケーション能力を養う。 ・「公民館祭り」等の地域行事への参加を通して、地域社会の一員であるとの意識を高める。
5 重点目標を達成するための校内組織体制	・学年会（授業・学年行事の計画立案） ・学部運営会（学年方針の検討と点検） ・学部会（生徒の情報交換・行事に向けての共通理解） ・分掌会（学校行事等の計画立案） ・主事会（行事等の計画の検討・承認）
6 目標の達成に必要な具体的取組	(1) 作業学習・生活単元学習・自立活動は、キャリア発達の観点から見直しを進め、研究を通した計画に基づいて実践する。 (2) 生徒の長所伸長のため、様々な場面で生徒やクラスの様子を観察し、教員間、家庭との緊密な連携によって、個に応じた支援を積極的に行う。 (3) 清掃指導は、学部を挙げて職員共通理解のもとで進める。 (4) 学校間交流は、日頃の学習を生かせるよう相手校との連携に努める。

7 達成度の判断・判定基準あるいは指標	・生徒の授業・行事等への参加態度 ・生徒からの感想・意見・生徒の言動や実態の変化 ・保護者からの感想・意見等 ・関係職員による反省・評価 ・学校評議員からの意見
8 取組状況・実践内容等	(1) 新たな製品（押し花コースター）製作を始め、新たな納品先を開拓した。 (2) 重複障がい過程では、生徒の特性に応じて作業分担しながら「香り袋」の製作に取り組んだ。 準ずる課程では昨年度に引き続き TV 会議システムを活用した共同学習に取り組んだ。 (3) 学年ごとに時間や場所を設定して、学部として清掃活動に取り組んだ。 (4) 「谷汲公民館まつり」「赤い電車まつり」等の地域行事に参加した。 今年も年 2 回の谷汲中学との交流を、相互に訪問する形で実施した。
9 評価の視点	評価
・作業学習の指導内容の精選と指導方法の充実を図ることができたか。 ・重複障がい課程で「製品づくり」を通した授業を工夫することができたか。 ・準ずる課程で ICT を活用した授業を設定できたか。 ・掃除の時間や場所を適切に設定し、実情に合った清掃活動ができたか。 ・居住地校や谷汲中学校との交流を充実したものにしたか。 ・「公民館祭り」等の地域行事へ積極的に参加し、地域社会の一員としての意識の高揚につながる活動ができたか。	A (B) C D A (B) C D A (B) C D A (B) C D A (B) C D (A) B C D
10 成果・課題	総合評価
○作業学習ではあらたな製品の製造や納入先の開発ができ、生徒の学習に対する意識の向上につなげることができた。 ○重複障がい過程では、新たに自立活動のねらいを意識しながら、生徒一人一人の力に応じた作業分担を通して製品を作り各所に配付する活動に取り組めた。 ○準ずる課程では、長良特支・可茂特支との TV 会議システムを使った共同学習は 2 年目を迎え、より充実した内容の学習に取り組めた。 ○「公民館祭り」では、太鼓の演奏を披露し、地域に向けて障がいのある生徒への理解を促すことができた。 ▲年度の後半になると、ファーム班（農作業）の活動が少なくなってしまった。 年間を見通した計画を綿密に立てていきたい。 ▲準ずる課程での ICT 活用は一部の教科に限られており、今後も研究を進めたい。 ▲居住地校交流では、相手校に活動場面を準備してもらったり、当方より自己紹介カードや年賀状を送ったりという、一方的な交流にとどまってしまった感がある。相手校の担当者との連携を密にし、より充実した交流を実施していきたい。	A (B) C D
11 来年度に向けての改善方策案	(1) 特にファーム班は冬季の活動が難しいので農作業に限定しない作業学習の内容を検討する。（グループ名の改変も含め） (2) 準ずる課程における ICT の活用については、総合学習で実施している TV 会議システムの活用等、他校との交流を拡大させ、活用の幅を広げていく。 (3) 居住地校交流については、学級通信や学級懇談会などを通して保護者の理解を深める働きかけを積極的に進める。
学校関係者評価 （平成 30 年 2 月 9 日実施）意見・要望・評価 ・居住地交流で得るものはこちら側だけでなく、相手校にも必ず得るものがあると思う。 ・積極的に校外に活動に出かけたり、地域の住民としても良い拠点となっているので、もっと広く学校のことを発信してほしい。	

